

洞庭包山林屋洞

横手裕

1. 歴史一瞥

1-1. 太湖の洞庭包山とその洞窟

江蘇省蘇州市郊外の太湖は古来、「震澤」（『尚書』禹貢）、「具区」（『山海経』、『爾雅』）、「五湖」（『史記』）、「菱湖」（『呉地記』）、「莫湖」（同）など様々な名前で呼ばれつつ次第に「太湖」の名称が一般化した。ここに浮かぶ洞庭西山の下にある洞窟が林屋洞である*¹。

洞庭西山は西洞庭山ともいう。太湖には湖岸と地続きの東洞庭山と、湖岸から離れた西洞庭山の二つの洞庭山がある。単に洞庭山と言った場合、普通はこの西洞庭山を指す。ここを「洞庭」ということについては、清の金友理が太湖の情報について詳しくまとめた『太湖備考』によれば、湖中に「金庭玉柱」があるからだという。またこの山は「包山」「苞山」とも呼ばれるが、同じく『太湖備考』によれば、山の四面をみな水が包んでいるからだといい、また仙人の鮑靚がここに住んでいたので、「鮑」を「包」として呼び名としたともいう*²。

この山の下に大きな洞窟があることは、やはり古くから知られていたようである。最初期の言及としては、西晋の左思（250?～305?）の「呉都賦」の注に付された後漢の王逸の言葉が挙げられようか。『文選』に次のように載せる（〔 〕は注釈部分を示す。以下同）。

指包山而為期、集洞庭而淹留。

〔班固曰、洞庭、澤名。王逸曰、太湖在秣陵東、湖中有包山。山中有如石室、俗謂洞庭。……善曰、周處『風土記』曰、陽羨太湖中有包山。……〕

（『文選』巻五、左思「呉都賦」）

ただし、この王逸の語は現行の『楚辞』に見えないことから、真実性に疑問がもたれている*³。

さて、この李善注に短く引かれている西晋の周處『風土記』も、包山の洞穴に言及する古い例のようである。唐代の類書では、微妙に言葉を違えつつ次のように引かれている。

『風土記』云、太湖中有包山、下有洞庭、穴傍行地中、無所不通、謂之地脈。

（虞世南『北堂書鈔』巻一五八「地脈」）

注1…太湖と洞庭湖、および洞庭山、林屋洞の関係については既に三浦國雄氏に論考があり、基本的な情報を提供してくれている。同氏「洞庭湖と洞庭山」（『中国人のトボス』、平凡社、1988年）参照。

注2…太湖について専門に解説した書物は少なくないが、今回は便宜的に諸説を整理してある清・金友理『太湖備考』に拠ることにする。この部分は該書巻五「西洞庭山」参照。

注3…前掲の三浦氏論文参照。

『風土記』曰、陽羨縣東有太湖、中有包山。山下有洞穴、潛行地中、云無所不通、謂之洞庭地脉也。 (歐陽詢『藝文類聚』卷九「湖」)

包山の下洞穴は単なるひとつの穴ではなく、地中からさまざまな所へと通じているということになっていたようである。

この太湖にある包山の洞穴は、長沙巴陵の洞庭湖にある君山の洞穴と通じ合っていたともいう。西晋・張華(232～300)の作という『博物志』に次のようにみえる。

君山有道、與吳包山潛通。上有美酒數斗、得飲者不死。(『博物志』卷八)

また、『文選』に載せる東晋・郭璞(276～324)の「江賦」とその注に次のようにみえる。

爰有包山洞庭、巴陵地道、潛達傍通、幽岫窈窕。

[郭璞山海經注曰、洞庭、地穴。在長沙巴陵、吳縣南太湖。中有苞山、山下有洞庭穴道、潛行水底、云無所不通、號為地脉。達、水中穴道交通者。]

(『文選』卷十二)

注4…清・郝懿行『山海經箋疏』(巴蜀書社、1985年)による。

その『山海經』の郭璞注は、現行本^{*4}では次のように記されている。

湘水出舜葬東南陬西環之、入洞庭下。

[洞庭、地穴也。在長沙巴陵。今吳縣南大湖中有包山、下有洞庭穴道、潛行水底、云無所不通、號為地脉。] (『山海經』卷十三「海内東經」)

注5…道蔵5-546上-12b。なお道蔵は文物出版社・上海書店・天津古籍出版社の影印本による。

なおここで郭璞は「洞庭は地穴なり」と述べているが、たとえば『紫陽真人内伝』にも「山腹の空虚は是れを洞庭と為す」という説明がある^{*5}。「洞庭」は文字通りには「洞中の広い土地(空間)」とでもいうことになるだろうが、洞庭山の名称の由来も実際にはそのあたりの意味にあったのではないかという気がしないでもない。

これらのほか、南北朝期の代表的な地理書である、北魏・酈道元(?～527)の『水經注』にも、次のように言及されている。

沔水與江合流、又東過彭蠡澤、又東北出居巢縣南、又東過牛渚縣南、又東至石城縣、分為二、其一東北流、其一又過毗陵縣北、為北江。

[……虞翻曰、是湖有五道、故曰五湖。韋昭曰、五湖、今太湖也。『尚書』謂之震澤。『爾雅』以為具區。方圓五百里、湖有苞山、『春秋』謂之夫椒。

山有洞室、入地潛行、北通琅邪東武縣、俗謂之洞庭。旁有青山、一名夏架山、山有洞穴、潛通洞庭山。上有石鼓、長丈餘、鳴則有兵。故吳記曰、太湖有苞山、在國西百餘里、居者數百家、出弓弩材、旁有小山、山有石穴、南通洞庭、深遠莫知所極。……] (『水經注』卷二十九「沔水」)

このように、南北朝時代には太湖の苞山に洞窟があり、地下で様々なところに通じているという話は、広く一般に知られていたようである。

1-2. 「靈寶經」出現伝説の地

道教ではこの洞庭苞山の林屋洞は、「靈寶經」出現の地として語られる。この系統の話は、既に上掲の諸資料に勝るとも劣らぬ古い時期に現れていた可能性もある。「靈寶經」の最初期の形が「靈寶五符」であったと推測されるが、その出現譚としてまず唐・玄奘撰『甄正論』巻中にみえる次の記述^{*6}が取り上げられることがある。

注 6…大正蔵 52-564a-b。

公子曰、先生以天尊書史不載以為虛妄。在於僕也誠亦如然。祇如靈寶之經、典記具載、豈亦偽乎。案『吳楚春秋』及『越絕書』、咸云、禹治洪水、至牧德之山、見神人焉。謂禹曰、勞子之形、役子之慮、以治洪水、無乃怠乎。禹知是神人、再拜請誨。神人曰、我有「靈寶五符」、以役蛟龍水豹。子能持之、不日而就。禹稽首而請。因而授之而誡禹曰、事畢可祕之於靈山、勿傳人代。禹遂用之其功大就、事畢乃藏之於洞庭苞山之穴。至吳王闔閭之時、有龍威丈人、於洞庭之苞山得此「五符」、獻之於吳王闔閭。吳王得之、示諸群臣、莫能識之。聞魯孔丘者、博達好古、多所該覽。令使齎「五符」以問孔丘曰、吳王閑居、有赤烏銜此書以至王所、莫識其文、故令遠問。孔丘見之而答使者曰、丘聞之、禹治洪水、於牧德之山遇神人、授以「靈寶五符」、後藏之於洞庭之苞山。君王所得、無乃是乎。赤烏之事、丘即未詳。先是江左童謠云、禹治洪水得「五符」、藏之洞庭苞山湖。龍威丈人竊禹書、得吾書者喪國廬。尋而吳果滅矣。此則事迹分明書史具載。謂之虛也、言何玷歟。

要するに、次のような話である。

一、禹は洪水の際に神人より「靈寶五符」を授けられ、洪水を起こす蛟龍、水豹を制伏した。

二、その後、禹はそれを洞庭苞山の洞穴に隠した。

三、その後、吳王闔閭の時、龍威丈人が苞山に入ってこれを見つけ、吳王に献上した。

四、吳王はそれが何かわからず、赤烏がくわえてきたなどと偽りつつ孔子に尋ねる。孔子は苞山のものならわかるがそれは知らぬと答える。その後、吳は

滅ぶ。

『越絶書』は後漢の袁康の作といわれ、また『呉越春秋』は後漢の趙曄『呉越春秋』の誤植とも考えられる。そこで、「靈宝五符」は後漢時代にはこのような伝説を伴いつつ出現していたと考えられる場合がある^{*7}。しかし一方で、上記の記述は『甄正論』所引のもの以外の『越絶書』や『呉越春秋』の文章には見られないことや、他書との比較などから、西晋以前の早い時期にこのままの話や「靈宝五符」が存在したと見なすことには慎重な態度をとる研究者も少なくないようである^{*8}。

また、よく似た話は緯書『河図緯象』（『古微書』卷三二）にも見えるので、識緯説系統から発した伝説の可能性もある。『河図緯象』では次のような話となっている。

太湖中洞庭山林屋洞天、即禹藏真文之所、一名包山。吳王闔閭登包山之上、命龍威丈人入包山、得書一卷、凡一百七十四字而還。吳王不識、使問仲尼、詭云、赤烏啣書以授王。仲尼曰、昔吾遊西海之上、聞童謡曰、吳王出遊觀震湖、龍威丈人名隱居、北上包山入靈墟、乃造洞庭竊禹書、天帝大文不可舒、此文長傳六百初、今強取出喪國廬。丘按、謡言乃龍威丈人洞中得之、赤烏所啣、非丘所知也。吳王懼、乃復歸其書。

ここでは、呉王の命により龍威丈人が包山に入って書を得ることは記すが、「靈宝五符」の名称は出て来ない。『河図緯象』の成立年代は未詳であるが、ひとまず緯書が盛んに現れた後漢頃と推定するならば、洞庭包山と「靈宝五符」や「靈宝経」が結びつくのはやはりもう少し後の時代であった可能性が考えられよう。なお『古微書』ではこの記述に次のような按語が付いている。

按、『靈寶要畧』。昔太上以「靈寶五篇真文」以授帝嚳、帝嚳將仙封之於鍾山。至夏禹巡狩度弱水登鍾山、遂得是文、後復封之包山洞庭之室。吳王闔閭出遊包山、見一人自言姓山名隱居、闔閭扣之、乃入洞庭取素書一卷、呈闔閭。其文不可識、令人齎之問孔子。孔子曰、「丘聞之、童謡云、吳王出遊觀震湖、龍威丈人山隱居、北上包山入靈墟、乃入洞庭竊禹書、天地大文不可舒、此文長傳百六初、若強取出喪國廬」。闔閭乃尊事之。

『越絶書』。禹治洪水、至牧德之山見神人焉。謂禹曰、「勞子之形、役子之慮、以治洪水、無乃怠乎」。禹知其神人、再拜請誨。神人曰、「我有靈寶五符、以役蛟龍水豹。子能得之、不日而就」。因授禹而誡之曰、「事畢可秘之於靈山」。禹成功後、乃藏之於洞庭包山之穴。至吳王闔閭之時、有龍威丈人得符獻之。吳王以示羣臣、皆莫能識。乃令齎符以問孔子。孔子曰、「昔禹治水於牧德之山、遇神人、授以靈寶五符、後藏於洞庭之包山。君王所得、無乃是乎。赤烏之

注 7… 代表的な例としては、任繼愈主編『中国道教史』上卷（中国社会科学出版社、2001 年）p133 など。

注 8… 代表的な例としては、小林正美『『太上靈宝五符序』の形成』の注（14）（同氏『六朝道教史研究』p102）参照。

事、某所未詳」。使者反白、闔閭乃尊事之。先是江左童謡云、「禹治洪水得五符、藏之洞庭之包山湖。龍威丈人竊禹書、得吾者喪國廬」。尋而吳果滅。

『靈寶要略』なる書について詳細は不明であるが、必ずしも早い時期の文献ではなかろう。ただ、ここに引く『越絶書』は『甄正論』とほとんど同じである。「靈寶五符」の名が出てくるのは単なる『甄正論』の文章の孫引きかもしれないが、あるいはもう一考を要するかもしれない。

なお、呉の顧啓期に『婁地記』があったとされるが(『隋書』卷三十三「経籍二」、唐・虞世南撰『北堂書鈔』卷一百五十八にはその引用として次のような記述がある。

『婁地記』云、洞庭山有三穴、並有清泉流出、惟西北一穴、僂僂纔得入。吳大帝使人持行、三十餘里而反、云、土間有浪聲、有大蝙蝠如鳥、拂火穴中、高處火照不見……

つまり、「靈寶五符」はともかく、呉王が使者に洞庭山の穴を探検させる話自体は、やはり早くからあったのではないと思われる。

さて、呉王と「靈寶經」の因縁は晉・葛洪『抱朴子内篇』辨問篇に見える。

『靈寶經』有「正機」「平衡」「飛龜授秩」凡三篇、皆仙術也。吳王伐石以治宮室、而於合石之中、得紫文金簡之書、不能讀之、使使者持以問仲尼、而欺仲尼曰、吳王閒居、有赤雀銜書以置殿上、不知其義、故遠諮呈。仲尼以視之曰、此乃靈寶之方、長生之法、禹之所服、寅隱在水邦、年齊天地、朝於紫庭者也。禹將僊化、封之名山石函之中、乃今赤雀銜之、殆天授也。以此論之、是夏禹不死也、而仲尼又知之。安知仲尼不皆密修其道乎。正復使聖人不為此事、未可謂無其效也。……

ただし、こちらには肝心の洞庭包山の名称は出て来ない。

梁の陶弘景が編纂した『真誥』の稽神樞篇は茅山についての道教的地理説が開陳され、茅山の下にあるという洞天、華陽洞天についてかなり詳しい解説がなされている。そして華陽洞天に深くかかわるものとして、林屋洞天についても言及がなされている。稽神樞篇の冒頭部では次のように句曲山すなわち茅山の地理を語り始める。

金陵者、洞虚之膏腴、句曲之地肺也。履之者萬萬、知之者無一。

[保命君曖作此言。按、曖此應在乙丑年六月己前甲子歲中事、始論此山受福之端也。其地肥良、故曰膏腴、水至則浮、故曰地肺。曆世遊踐、莫有知

其處者。]

句曲之山……（略）

江水之東、金陵之左右間小澤、澤東有句曲之山、是也。

[此蓋呼秣陵之金陵、非地肺之金陵矣。小澤即謂今赤山湖也。從江水直對望山、東西左右正自如此也。]

此山洞虛內觀、內有靈府、洞庭四開、穴岫長連。古人謂爲金壇之虛臺、天后之便闕、清虛之東窗、林屋之隔沓。衆洞相通、陰路所適、七塗九源、四方交達、眞洞仙館也。

[此論洞天中諸所通達。天后者、林屋洞中之眞君、位在太湖苞山下、龍威丈人所入得靈寶五符處也。清虛是王屋洞天名、言華陽與此、並相貫通也。]

周知のように、『真誥』の文章は二つの階層に分かれる。一つは本文であり、東晋の中頃に許謐・許翽親子や楊羲らが真人から授かったお告げを列挙する。もう一つはそこに加えられた注釈もしくは解説であり、150年ほど後に梁の陶弘景が書いたものである。「乙丑年六月己前甲子歲」は東晋時代で西暦364年に当たる。その頃のお告げの言葉として、句曲山すなわち茅山の山洞が華陽洞であるが、そこは「天后之便闕」であり、「林屋之隔沓」と述べられている。これを陶弘景が解説し、天后は林屋洞の眞君であること、そしてそれは太湖の包山の下で、龍威丈人が「靈寶五符」を得たところだと述べているのである。

『真誥』ではこのほかにも次のようにいくつか東晋時の眞仙たちによる洞庭包山への言及を載せている。

此山洞庭之西門、通太湖包山中。

（『真誥』卷十一「稽神樞第一」）

「此山」とは茅山のことである。すなわち、茅山の華陽洞は太湖包山の洞庭の西門だとしている。あるいは、

包山中有白芝、又有隱泉之水、正紫色。[此即林屋山也、在吳太湖中耳。]

（『真誥』卷十三「稽神樞第三」）

苞山下有石室銀戶、方圓百里。

（『真誥』卷十八握眞輔第二）

などと述べられている。

さて、林屋洞と「靈寶經」の関係を最も詳しく述べるのが『太上靈寶五符序』である。この書の精確な成立時期を考えるのも容易ではないかもしれないが、まずは東晋時代であろう*9。

この『靈寶五符序』では冒頭、「靈寶經」出現の経緯を詳しく述べる。原文は省略するが、冒頭部を要約すれば次のようなことを述べている。すなわち、

注9…小林正美氏は前掲書p95において、ここに引く『太上靈寶五符序』冒頭部の成立については建武元年(317)から永和元年(350)の間、すなわち東晋前半としている。このほか、任繼愈主編『道蔵提要（修訂本）』（中国社会科学出版社、1995）のNo.387では葛洪以後、劉宋以前とする。また、K. Schipper and F. Verellen ed., *The Taoist Canon I*, p232-3 もほぼ同様に、葛洪以後の東晋とする（John Lagerwey 執筆）。

帝嚳は天下の主となり、日月風雨も彼を助け、天地の心を得た。その時、九天真王・三天真皇と名乗る天人神真的官が降り、帝嚳に『九天真靈經』『三天真寶符』『九天真金文』を伝授した。しかしその天書の文章は難解で帝嚳は理解できず、自らの不才を歎きつつ、それを青玉の箱に封じて鍾山に蔵し、後世の聖徳ある者に託した。……その後堯の時代になり、天をつく洪水が起り、山は崩れて民は憂えたので、治水にたけた人物を求めた。堯を継いだ舜は禹に治水を行わせると、禹は各地をめぐって対処し、大水はようやく消え、民は丘を降りて暮らすことができるようになった。禹はそこで各地を視察しつつ鍾山に立ち寄り、上帝を祀り、その功績を天后と万靈に帰することを告げると、ふとこれらの書を得た。そこに真人が現れ、禹の功德を褒め称え、彼のすり減らされた命のために長生の道、真靈服御の方を授けた。禹は後にこれらをもとにあらためて『靈宝五符天文』なるものを作って「玄台」の中に蔵めるなどしつつ、服御の方を実践しながら表向きはその身を終えた。

そしてこれに続き、次のように龍威丈人が林屋洞の内部を詳しく探検する話となる。

其後吳王闔閭十有二年孟春正月、命楫江湖、耀旗蛟龍、觀兵於敵國、解帶乎包山。包山隱居爲使者、號曰龍威丈人、令極洞室之所、深履洪穴之源。包山隱居、得道者也。處于吳山、莫知其名、敖兀不羣、高離世榮、時人號曰包山隱居。闔閭數親駕修敬、問以安危。是其時嘗共講此源路之由、故爲其暫使乎。隱居於是帶燭載火、晝夜行邁、一百七十四日而返。既還具說云、不知其所極、隱居當步行可七千餘里、忽遇羣孔雜穴、千徑百路、沙道亂來、俱會一處、形象相似、門戶同類。其叢徑之口、有金城玉屋、周迴五百里、於衆道中央、明月朗煥、華照逸光、其中帷帳牀机、窓牖密房、錯以紫玉、飾以黃金、雲戶屢凌天、莫識其狀。於是顧盼無人、瞻望城傍、見題門上曰天后別宮、題戶上曰太陰之堂。隱居知是神館、不敢冒進門內、乃更齋戒、思眞三日、束修而入、看行其內、於玉房之中、北机之上、有一卷赤素書、字不可解。隱居再拜取書曰、「下土小臣、爲吳王使、請此神文、以爲外施、眞氣信效」。既還出外、而見其門戶自閉、聞其中有簫鼓激響、人馬之聲。隱居震懼、不敢久息、又不敢復進前路、恐致迷亂、不知歸向。於是迴返、齋所得書以獻闔閭。自說初入乃小庵、須火而進、然猶自分別朦冥、道中四方上下、皆是青石、方五六丈許、略爲齊等。時復有廣狹處、其脚所履、猶有水濕、或一二里間。隱居行當出一千里、不復冥庵、自然光照如白日、大道高燥揚塵、左右有陰陽溝、三十里輒有一石井、水味甘美、飲之自飽不飢。或見人馬之跡、旁入他道。其隱居所行路、及左右壁、似白石、石皆洞照有光、廣七八十丈、高暨二百許丈。轉近至洞庭、不復見上所極、仰視如天、而日光愈明、明如日盛中時。又不溫不涼、和氣冲然、聞芳香之氣鬱勃、終

而不休。及道邊有房室亭傳、奇瑋琤鏤、不可目名。既至衆道口、周行廣狹、隱居迴匝、相去可四五十里、四面有玉柱爲揭、題曰九泉洞庭之墟。其間植林樹成行、綠葉紫榮、玄草白華、皆不知其名也。五色自生、七寶光耀晃晃、飛鳳翔其巔、龍麟戲其下。斯實天地之靈府、眞人之盛館也。隱居具書其所履見示王。王肅然駭聽、乃清齋靜臺、祭天而受書焉。即其年太吳風雨以時、五穀豐熟、兆庶樂業、國內安融。闔閭珍貴其天文、而不解其辭、乃遣使者齎此書、封以黃金之檢、印以玉皇之璽、書旨以問魯大夫孔丘。使者到魯國、奉書跪於丘前曰、「吳王昔命駕出遊、瞻望海津、息卒於東林之丘、遊宴乎北包之山。於是秣駟戢輿、忽有赤鳥遊翔其間、銜此素書、墮王車前。大人元吉、靈瑞自天、饗國萬紀、金石長存。使臣出國、奉齎天文、願告禎祥來福之因」。丘恬然閑居、不發其函、乃答使者曰、「丘昔遊於西河之上、聞童謡歌曰、『吳王出遊觀震湖、龍威丈人名隱居、北上包山入靈墟、乃造洞庭竊禹書、天帝大文不可舒、此傳伯長百六初、今雖取出喪國閭』。丘案童謡之言、昔夏禹治水、拓平山川、功舉事訖、巡狩於鍾山之阿、得黃帝帝嚳等所受藏、上三天太上靈寶眞經。後遊會稽、更演解靈寶玄文、撰以爲靈寶文、藏一通於名山石碣、付一通於水神、當有得道道士得之而獻王者。丘恐此書、必靈寶符太上眞文也。若以赤鳥所銜而墮、丘未詳也」。使者跪謝、伏實如大夫之言。子路侍側曰、「奉君之使、罔君之命、非忠臣也。入國而期有司、受事而奸其辭、非良使。彼狡人矣、由請討之」。孔子曰、「夫振裳以冥太陽、仰手而障之白日、陽光其可掩乎、日月其可蔽乎。此二象焉、恠掩塞之爲惡耶。苟照之所逮、無傷也、汝無伐焉」。孔子乃告使者曰、「此天官之靈蘊、大聖之所撰、上叙太和陰陽之氣、下論道化養生之會、唯仙人能用其文、君王不能得其術。若乃抗身幽邈、遠尋自然、避羅鎖於無爲、豁爭競於深山幽居、是時問丘、將或告王靈文之奇奧、太上之微言也」。遂以書還使者、不開視也。使者歸、具說丘言。闔閭自傷方薄、嘆息而絕望、遂不復重求解釋也。乃藏之神館、祕貴靈文。其後閑旦、親自取視、函封不脫而失書所在矣。夫差獲之於勞山、終有殺滅之患、闔閭探之於洞庭、遂爲勾踐所并。是由丘所說童謡之言、喪國閭微矣。夫神文非啓授而攬之者、鮮不爲禍也。天書非道同而傳之者、無有不嬰罰於玄都也。

要約すれば以下のようなことになる。

吳王闔閭の十二年孟春正月、王は包山隱居とも呼ばれる得道の隱者、龍威丈人にこの洞窟を調べさせた。隱居はそこで灯火を携え昼夜ひたすら進むこと174日にして戻ってきた。隱居の言うことには、洞窟には終極点はなく、7千余里歩いたところで数多くの穴が一所に会するところがあった。そこは金城玉屋があり、周囲は5百里ほどで明月が輝き、建物の門上には「天后別宮」、戸上には「太陰之堂」と記されていた。隱居はこれを神館と知り、改めて3日齋

戒存思してから屋内へ入ると、机上に一卷の赤素書があった。書いてある文字は理解できなかったが、再拝して手に取り、「下士小臣、呉王ノ使ト為ル、請フラクハ此ノ神文、以テ外施ヲ為サンコトヲ、真氣ニ信效アラン」と告げてそれとともに外に出た。するとその門戸はひとりでに閉じ、人馬の声がしたので、すぐさま一目散に引き返し、その書を闔閭に献上した。さらに隱居の言うことには、この洞窟は入ったばかりだと薄暗くて灯火が必要だが、1千里ほど進むと白日のような自然の光があってもはや暗さはなく、洞庭に近づくにつれて頭上は天を仰視するのと同様に見えなくなり、日光は一層明るくなった。温かくも涼しくもなく、芳香がいつも漂っていた。衆洞の会するところに至ると四面に玉柱があり、「九泉洞庭之墟」と記されている。そこには名も知らぬ草木が生い茂り、鳳凰が飛び、龍や麒麟が戯れ、まことに天地の靈府、真人の盛館である、と。闔閭はこれらの話を聞いて驚き慎み、ものいみをして天を祭り、その書を受け取った。すると、その年の呉は五穀豊穡となり、兆庶は生活を楽しみ、国内は平和で安らかとなった。

しかし闔閭は結局その書に何が書いてあるかわからず、使者を送って魯の孔丘に尋ねさせた。すると使者は孔丘に対して、その書は赤鳥が銜えて持ってきたとの偽りを述べる。以下はおおむね前掲の話と同様に、そのために呉が滅ぶという顛末を述べている。

ここに至って、洞庭包山における「靈寶經」出現譚の最も詳しい説話が登場したと言えよう。これは前掲の『真誥』稽神樞篇に華陽洞天の内部を解説しているのと並び、魏晉期の文献で具体的な洞天の内部を論じるものとしては最も詳しいものであり、洞天思想を窺う上で大変貴重な記述と言えよう。

1-3. 林屋洞と道観

林屋洞は道教系の洞天思想により、十大洞天のうちの第九洞天とされたが^{*10}、他の洞天と同様に付近に道観が築かれ、道士が暮らした。これは唐王朝でしばしば行われた投龍簡の儀式を行うためであったという。その後、宋真宗の天禧五年（1021）に靈祐観と名を改めたようである。宋の朱長文撰『吳郡圖經續記』巻中「宮観」に次のように記す。

靈祐観在洞庭山。唐之神景宮也。蓋明皇時建。内有林屋洞、人間第九洞天也。為左神幽虛之天、即天后真君之便闕。『真誥』云、「句曲洞天、左通林屋、北通岱宗、西通峨眉、南通羅浮」、言諸洞可以交達也。舊傳、禹治水過會稽、夢人衣玄纁告治水法并不死方在此山石函中。既得之、以藏包山石室。吳人得之不曉、以問孔子。孔子曰、此禹石函文。所謂『靈寶經』三卷、蓋即此也。吳先主時使人行洞中二十餘里、上聞波浪聲有大蝙蝠拂殺火觀皮陸詩信然也。又有白芝紫泉、為神仙飲餌。蓋列真往來其間。唐時投龍於此、因建

注 10…林屋洞を第九洞天とするのは、現存する資料では唐・司馬承禎「天地宮府図」（『雲笈七籤』巻二十七）が最初ではなからうか。『無上秘要』巻四「山洞品」では八番目に記されており、位置がいまだ確定していなかった可能性があるが、そのあたりの事情は今後考察したい。

宮。天禧五年、詔重修賜靈祐之名、仍刻敕文于石。

また、宋の范成大撰『吳郡志』卷三十一「宮觀」に次のようにいう。

靈祐觀在洞庭山林屋洞傍。舊名神景宮。唐乾符二年建。内有林屋洞、洞中景物、具祥符圖經。本朝天禧五年、詔郡守康孝基重造。

神景宮の創建について朱長文は明皇すなわち玄宗の時と推測しているが、范成大によれば唐僖宗の乾符二年（八七五）ということである。唐の陸廣微の撰とされる『吳地記後集』にも、

神景宮、在縣西南一百二十里太湖中。唐乾符二年置。

と記されている。その後、天禧五年この神景宮改め靈祐（佑）觀とされた。このことについてはその事情を述べる勅文を刻んだ碑が建てられたようである。

靈祐觀はその後も各王朝で重修されつつ存続したようである。清の金友理撰『太湖備考』卷六「寺觀」に次のようにいう。

靈祐觀、在西山林屋洞傍。舊名神景宮、唐乾封二年詔建。宋天禧五年、詔郡守康孝基建、賜今額。嘉靖七年重修、甲人馬鯤記。後廢、本朝雍正元年重修、葉長揚記。

乾符二年に創建、天禧五年靈祐觀として再建された後、明の嘉靖七年（1528）に重修されたことを示す馬鯤の碑記があり、その後荒廃したが、ふたたび清の雍正元年（1723）に重修されたことを示す葉長揚の碑記があったのであろう。

なお、この靈祐觀の他に、下宮觀という道觀もあったようである。同じく『太湖備考』卷六「寺觀」に次のように記す。

下宮觀、在西山靈祐觀傍。[即靈祐觀下宮]

文字通り靈祐觀に従属する下宮であったようであるが、時代等の詳しいことはわからない。

2. 現在の林屋洞

2-1. 2011年8月9日の状況

筆者は2011年の8月9日（火）に林屋洞を訪れた。

林屋洞は蘇州の市街地からおよそ45キロほどの洞庭西山にある。前日の8

月8日に日本から蘇州に着いたばかりであり、交通事情などの情報収集する時間もなかったので、宿泊していたホテルでタクシーをチャーターして、「太湖の西山の林屋洞」と告げて直行した。ホテルで専属のタクシーを呼び出してもらい、到着するまでの間にフロントで受付をしていた4～5人の服務員と話をしたが、林屋洞を知っているのは一人だけであった。梅の名所として知られているとのことであった。タクシーの運転手にも林屋洞を知っているか聞いてみたところ、はっきりと答えなかったが、どうも行ったことがない様子であった。蘇州市内の西に位置するホテルを出発し、蘇州市街から太湖にうかぶ2つの小さな島——長沙島・葉山島——をつなぐ3つの橋（3つ合わせて「太湖大橋」というらしい）を渡って洞庭西山に入り、都合1時間あまりで林屋洞に到着した。

実は筆者は、20年ほど前に一度この林屋洞に来たことがあった。それは1992年11月2日のことで、当時、東京大学東洋文化研究所の教授であった蜂屋邦夫氏による道教調査団の一員として蘇州を訪れた時であった。私の記憶では、蘇州の滞在中に少し時間ができたので、蜂屋教授が団員に対して、どこか行きたいところがあれば行ってみてもよいので、希望はないかと聞いた。そこで私はおそろおそろ林屋洞を挙げてみたところ、意外とすんなり受け入れられ、参観のはこびとなった。太湖の中に洞庭東山（東洞庭山）と洞庭西山（西洞庭山）の二つの大きな山地があるが、東山は地続きになっているのに対し、



図1（左） 葉山島から洞庭西山を望む

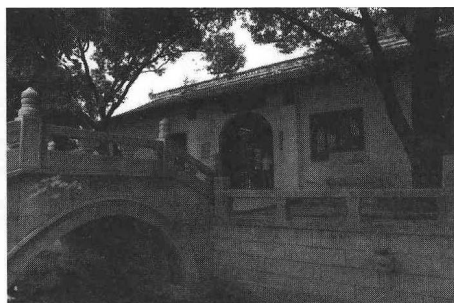


図2（右） 林屋洞入口

西山は本来は完全な島であった。現在は西山にも橋が架けられて実質的に地続きとなったが、20年前は西山に行くには東山から船に乗る必要があった。市内からなんらかの車に乗って東山の船着き場へ至り、小さな船に乗り込んでかなりの水しぶきを浴びつつ対岸へ到り、さらにそこから小型三輪タクシーをつかまえてしばしそれに揺られ、ようやくにして林屋洞へとたどり着いたことをおぼろげに覚えている。その時のことを思うと、やはり隔世の感があった。ちなみに、なぜ私はこの折に林屋洞に行くことを提案したかということ、当時、京

都大学人文科学研究所で開催されていた『真誥』の研究会に参加しており、私が訳注を当てられた部分に上掲の卷十一「稽神樞第一」冒頭部分が含まれていて、林屋洞についてあれこれと調べた後だったからであった。この時、まだコンピューター検索など普及していない環境にあって、手探りで上掲の『靈宝五符序』の部分を探し当て、十分に読めないながらも不思議な伝承と詳細な洞天の記述に強い興味を感じていた。その時から林屋洞とは一種の縁があったと言えるのかもしれない。

現在の林屋洞は、十分に観光地化しており、景区の入口には立派な華表と門が建ててある。入口の周辺には太湖で採れた魚介類の干物を列べたり、この地の銘茶として知られる碧螺春の看板をかけた売店などが立ち並んでいる。遠足で来たと思われる小学生の集団にも行き会った。50 元の門票を買って入口を通り、小さな売店などをみながら3分も歩けば山洞の入口すなわち入洞口へと到る。

今日、林屋洞には東西に2つの洞口があり、入洞口となっている西側の大き

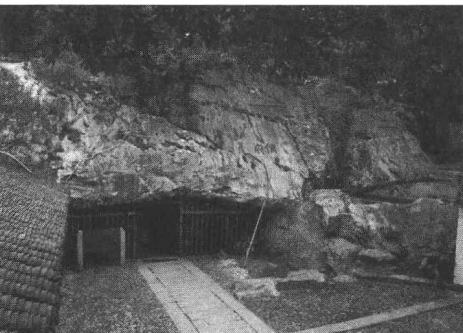


図3 林屋洞（雨洞）



図4 入洞口付近の摩崖石刻

な洞口は「雨洞」と呼ばれる。東側の洞口は「陽谷（陽谷）」と呼ばれ、出洞口とされている。入口の雨洞の上下は人の背丈ほど、左右はおおよそ3 mぐらいであろうか。入洞口の周囲にはいくつかの石刻の文字がみられる。出洞口周辺やその他のものも含め、林屋洞周辺にはかつて60余りの摩崖石刻があったが、文革で破壊されて現在は20ほどになってしまったという。まずは入洞口付近の主な石刻を挙げれば下記の通りである^{*11}。

注11…実地の見聞で確認できなかった情報については、李洲芳『太湖西山』（中国環境科学出版社、1996年）の林屋洞に関する部分を参考にした。

「天下第九洞天」 王鏊書。明正徳乙亥（1515）年刻。

「靈威丈人得大禹素書処」 篆書。俞樾書、暴式昭刻石。清光緒十二（1886）年。

「林屋古洞」 張平陽書、沈伯卿刻石。唐代の作と伝えられる。

「雨洞」 不明。

「僊府」 清代の石刻。陳作梅の修復。

またこれとは別に、入洞口の手前の通路の両脇に左右それぞれ4体、合計8体の神仙らしき人物のレリーフがあるが、目下詳しいことはわかっていない。今後調査したい。

さて、入洞口から内部に入ると、まずは大きな空間がある。下には水を湛えていて、順路には石橋が架けられている。天上に大きな「導遊図」が懸けられており、それによれば、内部はひとつづきの洞窟であるが、部分ごとに「隔凡洞」、「天后別宮（洞）」、「金龍洞」、「丙洞」、「陽谷洞」に分かれている。参観者はこの順番で内部を進むことになる。なお、洞内全体は中国の一般的な観光用鍾乳洞と同様に色とりどりのイルミネーションを使ってライトアップされている。以下、各洞の概要を記す。

隔凡洞：天上に「隔凡洞」を示す看板があり、「溝壑縦横、怪石嶙峋、峰回路転、碧波如鏡、天上人間、咫尺相隔」と記されている。ここには実際に、幅30センチ前後、奥行きが数メートル、そして高さは人の胸～腹ぐらいながら頂部は



図5 林屋洞内部の導遊図

扁平な「怪石」が立ち並んでいる。一説に、これらの「怪石」が「屋」が林立しているかの如き様子なので、「林屋洞」と呼ばれるようになったという。なお、この隔凡洞には「紫隠泉」という泉があるが、ここは太湖と通じ合っていて、雨期になると水が激しく湧き出すとのことである。

天后別宮：上部の壁に「天后別宮」の看板が懸かり、「柳暗花明、別有乾坤、神話伝説、膾炙人口」と記されている。林屋洞の中では最も巨大なスペースとなっており、上下左右は数メートル、長さは2～30メートルほどのややくねった長い空間が続いている。最も下の部分には水がたまっており（流れており？）、その脇に平らな道を作って参観者が歩けるようにされている。看板の文句に「膾炙人口」とあるが、前掲の諸資料にもみられるように、林屋洞は古来「天後の別宮」といわれて広く知られた。現在の説明によれば、それは具体的にはここを指すということになる。

図6 隔凡洞



図7 金龍洞



金龍洞：洞の岩壁に「金龍洞」の看板が懸かり、「龍宮仙府、飛黃騰達。唐宋兩朝為帝王祭祀和道教投放金龍、玉簡之所。」と記されている。「天后別宮」を過ぎて「丙洞」へ到るまでの比較的細い洞穴の途中にある。かつて唐代に林屋洞の脇に神景観があり、『蘇州府志』等によれば、唐王朝はここに歳ごとに使者を派遣して洞内に「金龍玉簡」投げ込んだという。1979年から1980年にかけて、ここから金龍が4つ（唐代のものと宋代のものが2つずつ）、金メッキの銅龍が4つ（すべて唐代のもの）、宋代の玉簡が3つ（一つには真宗の実名が明記されている）、五代の頃のものらしき神像（高さ69センチの胡人風のもの）などの文物が出土したという。これは現在、蘇州博物館に収蔵されている^{*12}。

注12…前掲『太湖西山』p27、于蘗・吳靖宇編著『蘇州名勝博覽』（古吳軒出版社、2010年）p144による。

注13…前掲『太湖西山』p24。

注14…前掲『蘇州名勝博覽』p144。

丙洞：天上に「丙洞」を示す看板があり、「南方之位、文明之象。相伝為林屋洞第三箇出口。」と記されている。金龍洞を通して少し開けた空間に出ると、そこが「丙洞」である。林屋洞には元来3つの洞口があり、丙洞はその一つであったが、1975年に山を開いて採石した際に壊れてしまったという^{*13}。林屋洞は民国以降は塞がってしまっており、本格的な整備が始まったのが1980年だということだが^{*14}、その間の出来事であったようである。

陽谷洞：洞中の岩に「陽谷洞」の看板が置かれており、「仙草長青、人生不老。左伝：日出于谷而天下明、故称陽谷。」と記されている。丙洞をさらに進むと大きく屈折する一帯に行き当たるが、その付近が陽谷洞のようである。ここをさらに進むと、狭くて細長い階段の通路が斜め上方に向かってまっすぐ延びて

おり、その先に外部の光が見える。ここを登り切ると、林屋洞の最終的な出洞口へと到る。

出洞口付近にはまた数多くの摩崖石刻が残されている。主要なものは以下の通りである *15。

「暘谷」 不明。出洞口の直上にあり、最近のもののようなものである。

「暘谷洞」 篆書。明の胡纘宗の書。やはり出洞口の真上にある。

「無礙居士道隱園記」 南宋の李弥大の作。紹興壬子（1132）年刻。1行21字で16行の摩崖碑。李弥大が儒を棄て釈老に遊び、この地に庵を築いて隠居した旨を記す。

范至先題名 南宋の范至先による石刻。淳熙戊戌（1178）年刻。1行7字で5行。

趙彦樞禱雨題名 南宋の趙彦樞による石刻。紹熙甲寅（1194）年刻。

陳翼叟等題名 南宋の陳翼叟らによる石刻。淳祐壬子（1252）年刻。

王兌等題名 王兌らによる石刻。『洞庭山金石』に南宋の摩刻とする。

錢大昕等題名 隸書。清の錢大昕らによる石刻。嘉慶丁巳（1797）年刻。

易順鼎詩刻 清の易順鼎の詩を記す。光緒丁亥（1887）年刻。

林屋洞の上は小高い丘になっていて（これを林屋山と呼ぶようである）、頂上には駕浮閣という楼閣が立っている。出洞口は丘の中腹のやや下方にある。

注 15…実地の見聞で確認できなかった情報については、前掲『太湖西山』の林屋洞に関する部分を参考にした。

図8 出洞口と付近の摩崖石刻



そこから少し降ってゆけば、順路の出口となる。出口となっている建物の裏には、次のような清代の石碑が立っていた。

「文星楼記」 王鳴盛撰。 乾隆三十八年（1773）年立石。

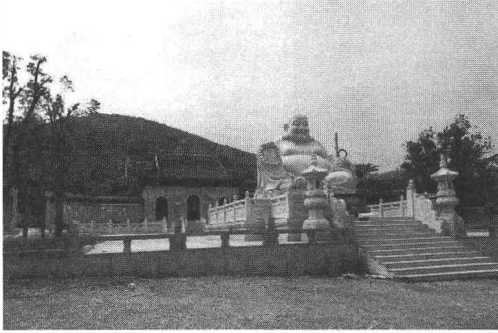
なお、少し触れたように林屋山には入道口と出道口周辺以外にも石刻があるようであるが、この日は以下の余記に記すような予定を考えていたことと、猛暑の中で体力的余裕がなかったこともあり、周到な搜索は出来なかった。また、前述のようにかつてこの林屋洞の傍らには靈祐観という道観があったとされるが、今日ではその痕跡らしきものは残っていないようであり、どのあたりに位置していたかわからなかった。むろん道士もおらず、基本的には純然たる観光施設である。

2-2. 余記その1 包山禅寺

林屋洞から西へ1キロあまりのところに包山禅寺（包山寺）という仏寺がある。筆写は8月9日の午前中に林屋洞を一通り見た後、午後は包山禅寺へと向かった。気温は35度はあろうかという猛暑にあえぎつつ、ゆるやかな坂道をゆっくり登って約40分ほどで到着した。

西山にはいくつか仏寺があるが、この包山寺は其中最も歴史が古い。寺でもらった簡介の類の説明文によれば、ここは南朝宋の永初年間の420年に創建されたもので、当初の名は包山禅院であったという。梁武帝の天監中（502～519）の重修を経て、同じく武帝の大同二年（536）に福願寺と改名した。唐高宗の顕慶元年（656）には「顕慶禅寺」の勅額を下賜されたが、やはり高宗の永淳元年（682）に包山寺と改名した。玄宗の天宝元年（742）には『宋高僧伝』にも見える神皓大師が住持となり、殿堂房屋を修復かつ拡張して1000余間とした。これよりその名が江南に広く知られるようになり、四方の学僧が集い、その数は千人にも達したという。そして唐肅宗の乾元三年（759）に「包山禅寺」の名を賜った。宋徽宗の政和年間（1111～1117）に寺は破壊されたが、欽宗の靖康元年（1126）年に慈受懷深禅師がやって来て重興し、寺名をふたたび包山寺とし、また高宗の建炎年間（1127～1130）には「包山顕慶禅師」と賜額された。元末の兵火で破壊されたが、明成祖の永楽年間（1403～1426）に呆庵禅師が重建し、宣宗の宣德三年（1428）にようやく伽藍が成り、改めて名を包山禅寺とした。清の乾隆六年（1741）に蔭南禅師が住持となって鐘楼や祖堂を修建し、同十八年（1754）に兆隆了元禅師これを継承し、大雄宝殿、大悲閣、大雲堂、満月閣、蔵経楼、凝香塔院、薬師殿、祖师殿、嫩桂閣、空翠閣、天五殿、大山門、放生池等を作って寺院を大いに拡張した。清末には衰えたが、民国になって太虚大師や大休和尚が住持となり、

図9 包山禪寺山門と布袋像



後にはここに仏学苑が併設されて人材を育成し、命脈をつないだ。文革の時に取り壊されたが、1995年に靈岩山に貫澈和尚を招いて修復を開始し、現在は牌楼、香花橋、山門殿、天王殿、大雄宝殿、藏經楼、念仏堂、齋堂、東西廂房、関房、御墨亭、配電房、鐘楼、鼓楼、僧寮、尊客堂、天香斎、凝香塔院、空翠閣、嫩桂閣、大山門、方丈院が完成したという。かつては唐三彩の観音塑像などの文物があったが、文革でみな破壊された。現存する唯一の寺宝は、全国でも二部しか残っていない明万暦年間の方冊大藏經（徑山藏、嘉興藏）であるという。これは明思宗の崇禎十二年（1639）にこの寺の僧の徳幢大師が杭州で浄財を募ったところ、その地の王懋官が出資して寄進したものといい、文革時には南京博物院に移して保存をはかった。この大藏經は移管時に正藏 211 函 1434 冊、続藏 90 函 790 冊、又続藏 43 函 362 冊あったといい、現在も南京博物院にあるが、こちらに戻せるように先方と交渉中とのことである。

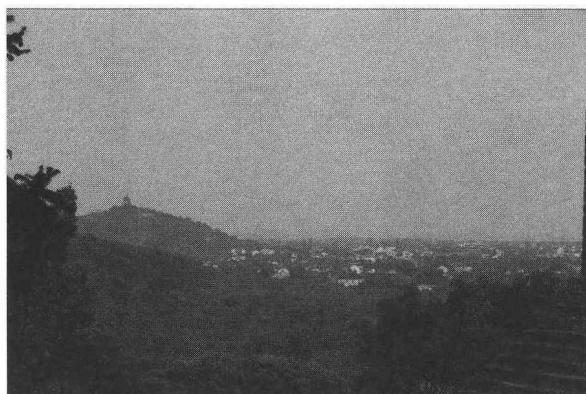
筆者が訪れた時には、山門殿、天王殿、大雄宝殿、藏經閣、念仏堂（？）を中心とする4層に新しい伽藍が立ち並び、基本的な部分はほとんど完成していたようであるが、建設中のものもあった。また上では触れられていないが、山門殿の前には巨大な布袋弥勒像が置かれ、参詣者を迎えている。寺は南向きの山腹にあり、最上層まで上がると眺望がよい。最上層からは、前方に駕浮閣を戴く林屋山がよく見えるほか、その先には太湖の水面がうっすらとかすんで見える。

2-3. 余記その2 金庭鎮

林屋洞がある洞庭西山の行政区画の名称は金庭鎮（蘇州市吳中区金庭鎮）という。この鎮の「金庭」という地名に筆者は関心を持った。林屋洞にほど近く、第八洞天として知られる茅山の華陽洞の中には「金陵」あるいは「金壇」、すなわち黄金の山があるとされ、実際に金を多く産出したというので、その地は「金陵」と呼ばれたという。また、呉越では茅山とともに神仙修行のための最高の福地とされたのが桐柏山であるとされ、そこは呉の「金陵」に対して越の「金庭」と呼ばれたという^{*16}。したがって、この洞庭西山の「金庭」なる地名も、林屋洞に絡んだ洞天思想に由来するのではなかろうかとの推測が起こる。実際、

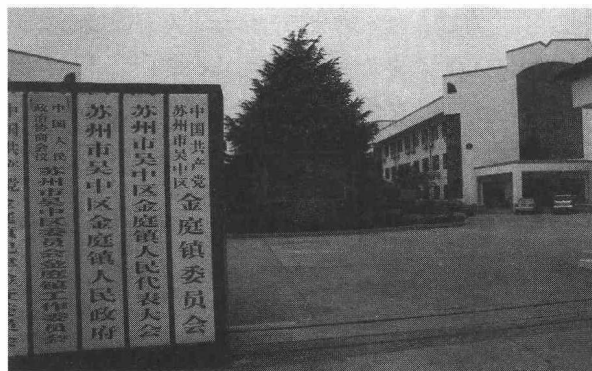
注 16…以上は『真誥』稽神枢篇に述べられる。

図 10 包山禪寺から林屋山を望む



注 17…明・王鏊撰『姑蘇志』卷三十三「古跡」に林屋洞を紹介して次のように記す。「林屋洞、在洞庭西山、即道書十大洞天之第九、一名左神幽虛之天。洞有三門、同會一穴。一名雨洞、一名喝谷、一名丙洞。中有石室銀房、石鐘石鼓、金庭玉柱、白芝金沙、龍盆魚乳泉石燕。有石門名隔凡。郡國志云、洞有五門、東通林屋、西達峨眉、南接羅浮、北連岱嶽。東有石樓、樓下兩石、扣之清越、所謂神鉦。吳王闔閭、使靈威丈人入洞、秉燭晝夜行七十日、不窮乃返曰、初入洞口、甚隘僂僂、而入約數里、忽遇一石室、高可二丈、上垂津液、內有石床枕硯石几、上有素書三卷、上於闔閭、不識、使人問於孔子、……」。

図 11 金庭鎮政府



『姑蘇志』卷三十三「古跡」等の林屋洞の紹介には、内部に「金庭」があることが記されている^{*17}。本稿冒頭でみたように、金友理『太湖備考』はその「金庭」を「洞庭」の名に結びつけて由来としていたわけであった。今回、包山禪寺を後にしてから、この鎮の名の由来についてなんらかの手がかりはないかと金庭鎮の中心部に立ち寄ってしばらく探してみたが、残念ながら特にこれといった証拠は探し得なかった。さらに洞庭西山を去った後も、金庭鎮に関する資料等に目を通して見たが、やはり特に成果はなかった。金庭鎮の公式サイトというものもあるが(www.jinting.gov.cn)、鎮の歴史や名称についての解説はない。あるいは必ずしも林屋洞天とは関係しない別の由来があるのかもしれないが、気になる点なので今後とも関連資料に注意しつつ考察してみたい。

2-4. 余記その3 甬里村

洞庭西山の西端付近に甬里村^{ろく}というところがある。筆写はここにも関心を持った。なぜならば、林屋洞あるいは洞庭包山から出現したとされる「靈宝經」の伝承にかかわる話に、甬里先生（禄里先生、角里先生とも）という人物が現れるからである。たとえば、『太上靈寶五符序』巻上の前掲の引用文に続けて次のような一段がある。

華子期者、九江人也。少好仙道、入山隱跡、採服草藥、棲身林阜、二十餘年。忽遇甬里先生、乃授之仙隱靈寶方。一曰「河圖隱存符」、二曰「伊雒飛龜」、三曰「平衡」。案合服之、日更少壯、色如少女、一日行五百里、能舉千斤、一歲十易皮、乃入潛山中而白日升天矣。

あるいは、『雲笈七籤』卷一百九「神仙傳」華子期にいう。

華子期者、淮南人也。師甬里先生、受山隱靈寶方。一曰「伊洛飛龜秩」、二曰「白禹正機」、三曰「平衡」。按合服之、日以還少、一日能行五百里、能舉千斤、一歲十易皮。後乃得仙去。

甬里先生とは、前漢の隠者でいわゆる商山四皓の一人であるが（『史記』卷五十五、留侯世家）、後に道教系の信仰に取り入れられて、「靈寶經」の伝承者の一人とされることとなったようである。この甬里村はまさしくここに甬里先生が暮らしたことに基づくという土地と伝えられている。上掲の金庭鎮公式サイトの中に「西山古村的歴史形成」と題する解説文があり、西山の甬里、東村、綺里、慈里の四つの古村落は、それぞれ商山四皓の甬里先生、東園公、綺里季、夏黄公がやってきて隠居した土地だとしている。地志の類にも、たとえば明・王鏊撰『姑蘇志』卷三十三「古跡」に、

甬頭、即甬里、在洞庭西山。漢甬里先生所居。史記正義、太湖中洞庭山西南有祿里村。

などと紹介されている。筆者は時間が許せばこの地を訪れ、靈寶經をはじめ道教に絡んだ遺物や伝説などが残っていないか確かめたいと思ったが、残念ながら今回は全くその余裕がなかった。また他日に期したい。